

〔論文〕

乳児保育における 保育者との関係性（Ⅰ）

—観察記録からみた乳児の「泣く行為」より—

佐々本 清 恵
Kiyoe Sasamoto

八尾市立荘内保育所

大 方 美 香
Mika Oogata

大阪総合保育大学
児童保育学部

要旨：本研究は、保育実践における乳児の「泣く行為」に焦点を当て、「乳児の泣く行為の意味」とそれに関わる「保育者¹⁾の役割」を明確にすることを目的としている。本研究は、2012年、A市A保育所に入所した乳児10人の観察記録から泣く行為の記述を取り出し分析を行った。その結果、多岐にわたる乳児の泣く行為を、特に「情動²⁾」に焦点をあて考察を試みた。観察記録の「情動」で泣く行為は、一つの事柄に関して様々な要素が含まれていた。よって、生理的欲求に起因する「不快」、「恐れ」、「嫌」、「驚き」に絞り、分析を行った。結果、泣く行為は、いずれも身体的・精神的なものであり、特に乳児では身体的影響が精神的影響へとつながることが多く、その時乳児に「働きかける存在としての大人の役割」が重要であると気づかされた。また生理的欲求に起因する乳児の不快で泣く行為は、おおむね1歳を過ぎて減少した。その理由として、乳児が家庭の生活文化から保育所の生活文化への移行に、おおむね1歳を過ぎて適応したことが推察され、その過程において保育者や大人の働きかけ、役割の重要性が指摘された。また、観察記録を分析し、保育に役立てることの重要性も指摘された。

キーワード：乳児、泣く行為、情動、保育者の役割

Ⅰ 研究の目的

保育所の保育実践は集団生活の中で行われる。その保育現場で保育者が困ることの一つに、子どもが「泣く行為」がある。これは、筆者がA市で0歳児と1歳児を担当していた保育者173人を対象に、2012年5月から7月にかけて行った質問紙調査³⁾からも明らかであった。実に147人(約85%)の保育者が「クラスの子どもが泣き止まずに困ったことがある」と回答していた。この結果からも、保育者の多くが、乳児が泣く行為に対して「泣くことの意味を考える」よりも「泣き止ませなければいけない」という負のイメージを持ち、そのことが保育者の困り感にも繋がっているのではないかと考えられた。

一方、近年乳児の発達を科学的に解明しようとする研究が盛んに行われるようになり、乳児の様々な可能性がわかってきた。その結果、乳児の泣く行為に関しても医療系や心理系の分野における論文や書物が多くみられるようになった。これらの研究は乳児保育を解明する先駆的、先進的な研究であり学ぶことも多くあるが、保育現場にいる立場から乳児保育を考える時、集団保育における乳児の研究が少ないことに気づかされた。

よって筆者は保育実践の立場から、保育実践における乳児の「泣く行為」に焦点を当て、乳児にとって「泣く行為はどのような意味を持つのか」を探求することにした。さらに観察記録を通して、乳児の泣く行為に対しての「保育者の働きかけ」に着目し、「保育者はどのように泣く行為を捉えているか」を考察することで、「保育者の乳児への働きかけがより明確になる」ことを期待してこの研究に着手した。

Ⅱ 方法

1 観察の対象

A市A保育所0歳児クラス10名。記録の抽出月齢は満月齢とする。(表1)

2 観察の期間

2011年4月1日～2012年3月29日の進級前日までの約1年間。

3 調査項目

0歳児クラスの保育者3名が、それぞれ担当した乳児3名について記した個人記録から、全ての泣く行為を取りだした。しかしその内容が多岐にわたったため、今回は、筆者が重要だと思う乳児の「情動」に焦点を当てて考察することとした。また泣く行為の取り出しと同じ方法で、笑う・機嫌がいい等の行為の記述も取り出し、泣く行為の考察に用いた。なお乳児の泣く行為には、重複する意味があることを前提として、複数で検討を行った。

4 倫理的配慮

観察記録の閲覧は、倫理的配慮のため所長や記録者である保育者の了解のもと行った。また観察記録からの泣く行為の取り出しは、倫理的なことからコピーや持ち出しはせず、手書きの記録紙を用いた。記録紙は分析後速やかに破棄した。

Ⅲ 結果

観察記録の「情動」で泣く行為は、一つの事柄に関して様々な要素が含まれていたため、今回は、生理的欲求に起因する「不快」、「恐れ」、「嫌」、「驚き」に絞り、分析を行った。

1 生理的欲求で泣く行為

乳児の「情動」として、まず表れるのが生理的欲求に対する「快」と「不快」である。

表2は、乳児が「生理的欲求で泣いた回数とその内訳」である。

それぞれ11か月と10か月で入所したA児とB児には、生理的欲求で泣く行為の記述はみられなかった。10か月で入所したC児には、11か月の時にお腹がすいて泣

いたという記述が1回あったが、他の生理的欲求で泣く記述はみられなかった。9か月で入所したD児は、観察記録の記述が全部で50と最も多かったものの、生理的欲求で泣いたという記述はみられなかった。11か月で途中入所したJ児は13か月に1回あったもののそれ以外には見られなかった。よって、9か月以上で入所した乳児が、生理的欲求を泣いて訴えたことはほとんどなかった。

それに対して、6か月で入所したE児、5か月で入所したF児、G児、3か月で入所したH児、3か月で入所し5か月で退所したI児には、生理的欲求の記述が多くみられ、6か月までに入所した全ての乳児が、生理的欲求で泣いていた。（生理的欲求で泣いた回数は、全記述に対して、E児22回中5回（約22%）、F児31回中6回（約19%）、G児20回中8回（40%）、H児40回中16回（40%）、I児8回中4回（50%）であった。）さらに、6か月までに入所し、保育所で12か月を迎えた乳児4人（E児・F児・G児・H児）を詳しくみてみると、生理的欲求で泣く行為は、7か月までに集中しており、その後11か月まで少しはみられるものの、12か月を過ぎると泣く行為がみられなくなった。

生理的欲求の内訳は、睡眠21回、食事（ミルク）19回、排泄1回の順であった。

また、0歳児クラスの乳児が「生理的欲求で泣く行為」への保育者の関わりは、おおよそ1歳までであった。

2 恐れで泣く行為

恐れで泣く行為は、観察記録の「怖くて泣いた」「恐ろしくて泣いた」という場面を抽出した。表3は、「初めての経験で泣いた乳児の恐れと思われる場面」である。

恐れは、初めてのことに對するものが最も多く、特に「見慣れない、動くもの」を見た時に泣く乳児が多かった。サンタクロース・トナカイの扮装では、9人中7人、

表1 対象となる乳児とその月齢

対象児	入所	進級及び退所	入所時の月齢	退所時及び進級時の月齢
A児	4/1	3/29	11か月	23か月
B児	4/1	3/29	10か月	22か月
C児	4/1	3/29	10か月	22か月
D児	4/1	3/29	9か月	21か月
E児	4/1	3/29	6か月	18か月
F児	4/1	3/29	5か月	17か月
G児	4/1	3/29	5か月	17か月
H児	4/1	3/29	3か月	15か月
I児	4/1	5/31	3か月	5か月（途中退所）
J児	10/20	3/29	11か月（途中入所）	16か月

表2 生理的欲求で泣く行為の記入回数とその内訳（白表示は在籍している時の月齢）

対象児 \ 月齢	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
A児								0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
B児								0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
C児								0	M1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
D児							0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
E児				0	S5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
F児			S1	S1	S1	M1	0	M1	S1	0	0	0	0	0						
G児			M3	M1 S1	S1	S1	0	0	S1	0	0	0	0	0						
H児	M2	M2 S1 H1	M3 S3	0	M2	0	S1	S1	0	0	0	0								
I児	0	M3 S1	0																	
J児								0	0	S1	0	0	0	0						

註) 数字は記述回数、アルファベットは内容を表す。M (ミルク及び食事) S (睡眠) H (排泄)

表3 初めての経験で泣いた「乳児の恐れ」と思われる場面

場面 \ 月齢	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	合計
クリスマス会でサンタ及びトナカイを見て			H		F・J	E			C	B	A		7人
パペット人形を初めて見て	H												1人
獅子舞を見て			H		G	F	E				B		5人
保育者のフラメンコ姿を見て				H								A	2人
節分の鬼を見て					H		F・J	E		D	B・C	A	8人
バルーンを見て						J							1人
紙ふぶきがこわい						H							1人
ゆさぶりあそびが怖い (タオルで)				A									1人
シャボン玉がこわい	E												1人

註) アルファベットは乳児を表す。

獅子舞では9人中5人、節分の鬼では9人中8人とほとんどの乳児が泣くという行為で、自分の不快感を表していた。

また、いつも見ている保育者であっても、「フラメンコ姿に泣く」という事例のように、いつもと違う格好に拒否反応を示す乳児もいた。観察記録には、行事という特別な場で泣く姿が多く記述されていた。しかし記述の中には、行事以外、例えば「しゃぼん玉を見て泣く」「紙吹雪を見て泣く」「揺さぶり遊びを友だちがしているのを見て泣く」等、他の乳児が泣かない場面で泣く乳児の記述もあった。反面、他の乳児が泣いても泣かない乳児もいた。

また、乳児が「恐れて泣く行為の記述」を0歳児クラスとしてみた場合、10か月児から21か月児までという、ほぼ1歳児クラスに進級するまで記述があった。保育者は、1歳児クラスに進級まで「恐れて泣く行為」に対応していた。

3 嫌で泣く行為

嫌で泣く行為は、観察記録に「嫌で泣いた」と記述されていた場面を抽出した。

表4は、乳児が「嫌で泣いたと記述されていた場面」である。

表4 「嫌で泣いた」と記述されていた場面

場面 \ 月齢	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
薬を飲むのが嫌	E											
手に砂がついたのが嫌				D	B							
食事に出了ものが嫌		F			D・J	D						
階段登りが嫌					J							
オマルに座るのが嫌							J					
服を脱ぐのが嫌							D					
芋ほりで汚れた手が嫌									D			
歩くのが嫌（で歩かない）												D

註) アルファベットは乳児を表す。

表5 「驚きで泣いた」と記述されていた場面

場面 \ 月齢	9	10	11	12	13	14	15
初めての沐浴びっくりして	E						
保育者の声に驚いて		F				D	
急に部屋の戸が開いて					A		
自分のうんこを見て							D

註) アルファベットは乳児を表す。

嫌で泣いたという場面は、E児（8か月）の「薬を飲む」のから、D児（19か月）の「歩くのが嫌」まで、違う内容が8つの記述されていた。記述があった乳児は5人。クラスの約半数が泣く行為で嫌なことを表していたが、泣くことで表さない乳児もいた。ただし観察記録には、乳児の泣く行為全てが記述してあるわけではないので、他にも「嫌で泣いた場面」があった可能性がある。

記述回数では、一番記述が多かったのがD児の6回、それからJ児の3回と続き、B児・E児・F児が1回ずつだった。期間は、D児が11か月から19か月の9か月間に及んでいるのに対し、3回記述のあったJ児は、12か月から14か月までという3か月間に集中していた。8か月で薬を飲むのが嫌だと泣いたE児には、その後泣いたという記述は見られなかった。

記述の内容は、砂等の「物」に対して泣いたのが2人、薬、食事等「口に入るもの」に対して泣いたのが4人、服を脱ぐ、オマルに座る等の「行為」に対して嫌で泣いたのが3人だった。その中で、D児（19か月）の「歩くのが嫌で歩かなかった」という内容には、「(それまで歩いていたのに) 歩くのを嫌がった」という記述があり、それまでの泣く行為とは記述の内容に違いがあった。

乳児が「嫌で泣く行為の場面」を0歳児クラスとしてみた場合、内容には個人差や月齢による変化があり、保

育者はひとりひとりの「嫌で泣く行為」を把握し対応する必要があった。

4 驚きで泣く行為

驚きで泣く行為は、観察記録に「驚きで泣いた」と記述があった場面を抽出した。

表5は、乳児が「驚きで泣いたと記述されていた場面」である。

内容は「沐浴の時びっくりして泣く」、「保育者の声に驚いて泣く」、「急に戸が開いて泣く」、「自分のうんこを見て泣く」の4場面であった。初めての沐浴で泣いた9か月のE児は、その後水遊びの経験することで、沐浴で驚くことがなくなり、水遊びを楽しんだという記述がみられるようになった。保育者の声に驚いて泣いたF児は、泣く前後の記述内容から推察すると、目的物に対して行動を起こそうとした瞬間の保育者の大きな声に驚いたと思われる。同様にD児も探索活動中、保育者に掛けられた声に驚いて泣いていた。急に戸が開いて泣いたのはA児。自分のうんこを見て驚いて泣いたD児は、オマルに座って排便をし、初めて自分のうんこを見た時に泣いたが、それ以降泣いたという記述はみられなかった。

乳児の「驚きで泣く行為の場面」を0歳児クラスとしてみると、保育者が予想しない場面で驚いて泣く場合が

あり、保育者にはひとり一人の泣く行為への観察が必要であった。

IV 考察

1 生理的欲求で泣く行為

(1) 生理的欲求で泣く意味

生理的欲求に関してよく見られるのが、生理的欲求を泣いて知らせるという行為である。「生後4・5か月までの泣きの多くが、不快状態の表出で、緊急を伝えるサイン」(星、塩崎、勝間田、大川, 2009)といわれるように、乳児の生理的欲求で泣く行為は、「不快状態」の表出である。では、集団で生活する保育所の乳児の生理的欲求で泣く行為には、どのような意味があるのだろうか。観察記録では入所から1歳過ぎまでに「おなかがすいた」「眠たい」等の記述が延べ41回みられたが、1歳を過ぎてから極端に減少した。その現象をまず睡眠より考察する。

① 睡眠からの考察

表6は、生後3か月から24か月の「赤ちゃんの睡眠」を表にしたものである。この表によると、赤ちゃんは、生後12か月頃から、夜連続して眠ることができるようになり、昼の睡眠時間も午前中1回午後1回とだいたい決まってくる。このように身体的な睡眠のリズムが決まってくると、仮に保育所で午前中1回、午後1回の睡眠が確保できれば、眠たいという不快状態を泣いて知らせる必要がなくなることが推測される。A保育所の低月齢児は、こどもの状態に合わせて睡眠をとるが、成長するにつれて午前中1回午後1回、あるいは午後1回の睡眠に移行していた。よって今回の対象児は、1歳までに保育所の生活リズムに適応できる成長をしたことで、眠たいという生理的欲求を泣いて知らせる必要がなくなり、それが生理的欲求で泣く行為の1歳を過ぎてからの減少につながっていると思われた。

② 食事からの考察

それでは食事・ミルクが欲しいと泣く行為はどうであろうか。A保育所の乳児がミルクを飲む時間の間隔は、入所前家庭で飲んでいたりリズムに合わせ、3時間ないし4時間という時間の間隔であった。例えば朝6時にミルクを飲んでくると、9時か10時がミルクの時間となり、8時に飲んでくると11時か12時がミルクの時間ということである。また飲む量も一定ではなく、その日によって違う乳児もいた。しかし1歳頃には、保育所の生活リズム、9時30分頃の補食、11時30分頃の食事、3時頃の補食という生活に適応して過ごせるようになった。もちろんひとり一人に差があり、その日の体調によっても違いがあったが、夜一定時間眠ることで、朝の食事の時間がほぼ一定になり、加えて次の食事までの食事をミルク以外でも補えるようになったことにより、1歳過ぎの生理的欲求で泣く行為が減少したと思われた。

③ 排泄からの考察

排泄については、もう少し詳しく調べる必要を感じた。観察記録では、4か月児が「(おしっこ)を泣いて知らせた」という記述が1回あるものの、それ以外にはなかった。排泄は生理的欲求ではあるが、赤ちゃんは、排泄をする前に知らせるのか、排泄している時の不快を知らせるのか、排泄をした後の不快を知らせるのかでもその意味が変化する。前者であれば欲求を知らせることになり、後者であれば不快感を知らせることになる。どちらにしても、病気等特別な理由がない限り、排泄は出すことを欲求として表さなくても満たされる点では、他の2つの欲求とは若干異なり、それが記述回数の少なさに結びついているのではと思われた。

④ 言葉との関係

また、生理的欲求で泣く回数が減少する理由としては、「泣く行為」以外のコミュニケーションの存在がある。その手段として考えられるのが言葉の獲得である。先行

表6 赤ちゃんの睡眠

月齢	時間	合計
3か月	0時～2時 2時30分～6時 6時～9時 10時～12時 14時30分～17時30分 21時～23時	15～16時間
6か月	5時～7時 10時30分～11時30分 13時30分～15時15分 19時30分～4時	13～14時間
12か月	9時30分～10時30分 14時～15時 19時～6時	13時間
24か月	13時～15時 19時30分～6時30分	13時間

資料:AMERICAN ACADEMY OF PEDIATRICS:米疾病センター(CDC)“CARING FOR YOUR BABY AND YOUNG CHILD, BIRTH TO AGE 5”(AMERICANACADEMY OF PEDIA TRICS):“DAY-BY-DAY BABY CARE”BY MIRIAMSTOPPARD, M, D 厚生労働省 協力:AMERCAN ACADEMY OF PEDIATRIDSを参考に作成された図を基に表にした。

研究で、「始語までの『泣き』は、生理的な不快状況を訴えることが目的であり、その意味では一方的要求のための表出行動といえる。生後1年を経て言語表出の能力が成熟するにつれて、「生理的泣き」が減少する（斉藤、武井、荻野、大浜、辰野，1981）ことからわかるように、言語による情報伝達に変容していくことになる」（志村，2005）といわれるように、密接な関係があるのは明らかだ。GESELL（1940）が「1歳児では、反復と模倣によって、自分の身につけた言葉を口にする。口で言ってもそれに従って行動する。」「言葉で言わなければ、咳払いをしたり、キイキイ言ったりしながらそばによっていく」といっているように、1歳では、少しずつ自分の思いを言葉や身振りなどで、相手に伝えることができるようになっていく。これが、「生理的欲求を泣いて知らせる」ことの減少につながっていると思われた。

以上をまとめると、生理的欲求で泣く行為が1歳で減少するには、保育所の生活文化を持つ場所への適応と、「泣く行為」以外のコミュニケーションの能力の発達があった。

（2）保育者の関わり

保育所に通う乳児の生理的欲求で泣く行為の減少には、保育所の生活文化に適応できる成長が関わっていると述べたが、言い換えれば、いくら集団であっても適応できるまでは、ひとり一人の生活リズムに合わせた対応が必要だということであり、その対応において重要になってくるのが保育者の役割である。

そこで生理的欲求で泣く時期の乳児に対して、保育所で生活するために必要な保育者の関わりを「生理的欲求を満たされることで快の状態になったと思われる記述内容」を手掛かりに考察した（表7）。表7のように、観察記録は全ての泣く行為や笑う行為、機嫌がよくなった行為を記述したものではないが、睡眠や食事の生理的欲求を満たされると、乳児の機嫌が良くなり笑顔が見られることは観察記録にも記述されていた。また、「生理的欲求で泣く」行為の期間と「生理的欲求を満たされることで快の状態になったと思われる」期間はある程度の重なりを持っている（図1）。ということは、生理的欲求で泣く行為は不快の緊急性を訴えるものであるが、そこに保育者が介入しその欲求をみたすことで、乳児は満たされずに泣く（不快）の状態から、満たされて笑う（快）の

表7 生理的欲求を満たされることで快の状態になったと思われる記述内容

場面	月齢	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
睡眠後廊下で遊ぶと笑う										D			
眠った後機嫌がよい					G・F	E	H			B・F			
朝寝の後機嫌がよい						F							
食後機嫌がよい						E・G	E・H		G・C	G			
食後ご機嫌で大声をあげる										C			
ミルクを飲むと機嫌がいい		H											

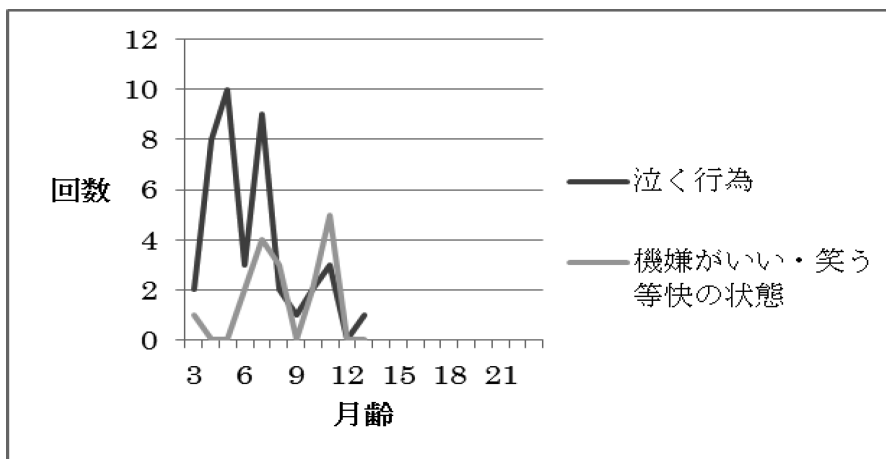


図1 生理的欲求で泣く行為の記述回数と快の状態だと思われる記述回数の比較

状態に変化することがわかる。保育者に必要なのは、乳児が「生理的欲求で泣く行為」から「満たされて笑う行為、機嫌がよくなる行為」を導き出すことであり、「絶えずお腹がすいた不快な状態」でも「絶えずお腹がいっぱいの状態」でもなく、「お腹がすくと泣くが、保育者に満たしてもらおうと機嫌が良くなる」という快の状態を導き出すための保育者の関わりが重要だと思われた。なお、乳児には「快の状態」と「不快の状態」がともに必要であるという結果には、もっと深い研究が必要だと思われるが、ここでは保育所の保育にとって乳児が「機嫌よく過ごす」ことは大切な保育目標であり、その保育目標を達成するための保育者の役割として考察を行った。

また、0歳児クラスという集団として見た場合、1歳頃までという期間が限定されたものであるからこそ、「生理的欲求を満たすための関わり」を大切にクラス運営が求められる。

2 恐れで泣く行為

(1) 恐れで泣く行為の意味

次に、乳児の「恐れで泣く行為」を考察する。観察対象の保育所では、乳児が1歳を迎えるまでは、大きな集団で催される会等、日常とは違う刺激を受ける場所にはあまり参加しない。よって初めてのものに対する「恐れ」は、もう少し前から感じていると思われ、サンタクロースやトナカイの扮装、獅子舞や節分の鬼は、保育所の行事によって乳児が初めて出会ったものである。乳児にとって、初めて出会うものが多いのは当然であるが、特に行事はいつもと違う雰囲気の中で初めてのものに出会う場であり、そこで感じる恐れや不安は、初めてのものに対する拒否的反応として捉えることができる。乳児によって違いがあるが、サンタクロース、獅子舞、鬼といった、「動く奇異なもの」に対しては、ほとんどの子が泣くことで拒否的反応を示していた。またそういうものに対しては、泣くという行動だけではなく、「身体を固くする」「しがみつく」等で不安や恐れを表す乳児や「泣きながら保育者に抱かれ、泣きながら顔を上げ、見てはまた泣く」というのを繰り返す乳児がいた。また、そのものから少し距離を置くと泣き止む姿もあった。そして恐れは、行事以外の日常のなかでも表れた。「(タオルでの)ゆさぶりあそびが怖い」「しゃぼん玉が怖い」というように、それまで体験していないものに対しては、見るだけでこわがる様子が見られた。よって0歳児期の「恐れで泣く行為」は、初めてのものに対する拒否的反応も含めて、身体的な不快を泣く行為で表す情動として捉えることができる。

(2) 保育者の関わり

「恐れ」については、開(2012)は「赤ちゃんは他者の表情を巧みに読み取ることで、危険を回避し、自らの行動を決定している」といっている。このように、1歳でも保育者の表情を読んで、自分の行動を判断するのであれば、乳児の「恐れ」に対処する保育者の役割も重要である。「危険なもの」に恐れを感じている時は、表情で危険だと知らせ、乳児が恐れを感じて泣いてはいるが「危険でないものや経験させたいもの」に対しては、不安や恐怖を和らげるような表情や声かけを心がける必要がある。すなわち「恐れ」を感じている事柄に対しては、「危険」を知らせる以外、保育者が「安心感」を持たせるような接し方が必要である。また初めてのものに対して、遠くで見ていると泣かないが、近くによると泣いて拒否するというのはよく目にする姿であるが、それは恐れに対する乳児の反応の一つであると受け止めて対応することも大切である。乳児、特に0歳児の「泣いて拒否する」のは「怖い」という身体的な不快である。保育者は、時として「怖くない」と言って泣き止ませようとするが、まず「怖くて泣く行為」を受け止めようとして、「大丈夫」という安心感を持たせる言葉かけが必要である。このように、保育者には乳児にとって「泣く行為にどのような意味があるのか」を理解すること、すなわち子どもを理解する力が求められる。

なお、行事で出会うサンタ・獅子舞等、初めて見るものに対しての泣く行為を、ここでは観察記録の記述及び前後の内容から「恐れ」として分類し考察したが、乳児が初めてのものを見た時の泣く行為には「驚き」の要素も含まれていると思われる。このように乳児の泣く行為には、一つの意味ではなく様々な意味が含まれており、それが今回の研究の難しさでもあった。よって保育者には、乳児が泣く行為を様々な角度から考察する姿勢も求められると思われた。

また、0歳児クラスという集団として見た場合、一見「同じ恐れで泣く行為」と思われる泣く行為に対しても、「ひとり一人の泣く行為の意味」を受け止めて対応する必要がある。

3 嫌で泣く行為

(1) 嫌で泣く行為の意味

嫌で泣く行為の記述が一番多かったD児の嫌で泣く行為は、9か月の時の砂が手に付いた感触(触覚)から始まっていた。その後「砂が嫌で泣く行為」の記述はなく、14か月の時の「笑う行為」の記述の中に「砂に触って笑う」という内容があり、D児は「砂に触る」という感触を徐々に克服したと思われる。しかし、16か月では

芋ほりの時に土が手に付いたのが嫌で泣いていた。「嫌」という感触はある程度経験で克服できると思われるが、それはそのものに対してであり、砂と似たものである土の感触は、砂に慣れた後でも続いていた。また、12か月の時には食事という、味覚・視覚も含めた「口に入れるものの感覚が嫌で泣く」行為も見られた。その後食事に出たものが嫌で泣く行為の記述は、14か月からみられなくなったが、その理由としては、D児の泣く行為が①日常化したので改めて記す必要がなくなった②嫌であることには変わらないが、保育者が配慮するようになった③言葉や動作で嫌と言えるようになった④口に入れるものに対して抵抗がなくなった（克服した）等が考えられるが、それに対しては観察記録だけで判断することはできなかった。しかしD児が14か月の時、新たに「服を脱ぐのが嫌で泣く」という、これまでの「感覚で泣く行為」とは違う、大人がD児に要求した「行為に対しての嫌で泣く」姿が見られるようになった。このことは、一見「同じ嫌で泣く行為」ではあるが、「内容が少しずつ変化している」ことを意味していると思われる。その後19か月になると、今まで行ってきた「歩く」という行為を拒否する「歩くのが嫌で泣く」という明らかに保育者を意識した行為が見られるようになった。このように、D児の「嫌で泣く行為」は成長とともに、人との関係のなかで生まれる拒否、抵抗に移行していったと思われた。

次に嫌で泣いた回数が多かったJ児は、12か月と14か月以外には泣く行為の記述がみられなかった。11か月で途中入所したJ児は、入所1か月を過ぎた頃から保育所に慣れ、観察記録の笑う行為の12か月の欄に「機嫌よく過ごす」という記述があった。慣れてきたことで、保育者に泣いて伝えることができるようになったとも考えられる。食事に出たものが嫌で泣いたり階段の登り下りが嫌で泣いたりしたJ児の泣く内容は、12か月に「食事が嫌」という味覚や視覚に対しての嫌があったが、その後は「階段を登るのが嫌」というように保育者を意識した「行動に対する嫌で泣く行為」が見られた。

それぞれ1回ずつ記述があったE児は8か月で、F児は9か月で、B児は12か月の時「嫌」で泣き、内容は食事が出たものや手に砂がついた感触であった。3人の乳児については、その後の様子は観察記録からは読み取れなかった。しかし嫌なことを泣く行為で示していたこの3人に、12か月以降の記述がないことにも様々な理由が考えられ、興味深い現象であった。また8か月の時食事が嫌で泣いたE児の笑う行為の記述の中に「それまで離乳食を喜んで食べた」というのがあり、この時期E児の食事に対する変化があったことが伺えた。これは、それまで大丈夫であったものが「嫌」に変化する可能性があ

ることを示していると考えられる。

多くの事例があるわけではないのもっと考察が必要であるが、乳児の嫌で泣く行為の内容は、低月齢の時は触覚、味覚等の感覚で泣くことが多く、月齢が高くなるにつれて、大人との関わりの中で生じる嫌で泣く行為が多くなることが推察された。

（2）保育者の関わり

乳児の嫌で泣く行為は、様々な意味を持つが、本研究では「嫌で泣く行為の意味」の項目で推察された「低月齢の時は触覚、味覚等の感覚で泣くことが多く、月齢が高くなるにつれて、大人との関わりの中で生じる嫌で泣く行為が多くなる」という結果をもとに保育者の関わりを考察することにした。小林（2010）によると、「感覚とは比較的局所的な諸刺激を感覚器官が受容した結果生ずる認知であるとされる」とある。低月齢の乳児が嫌で泣く行為が、感覚器が受容した快不快であるなら、低月齢児の嫌で泣く行為は「価値観に近い感情とは異なる次元の情緒」（小林, 2010）である「情動」として捉える必要があると思われた。しかし月齢が高くなると、乳児の嫌で泣く行為は、「情動」の表出での泣く行為から少しずつ変化していき、「服を脱ぐのが嫌」等保育者との関わりの中かで見られるようになった。表7には記述していないが、「外遊びの後部屋に帰ろうとして泣いて怒る（A児・12か月）」「遊びを制止されて泣く（F児・16か月）」等の泣く行為の記述があり、その行為を「部屋に入るのが嫌」「遊びを止められたのが嫌」という「嫌で泣く行為」として受け取ると、乳児の嫌で泣く行為は、保育者への要求や抵抗が含まれる「嫌で泣く行為」に移行していることがうかがえ、本研究における「嫌で泣く行為」に対しても更なる考察が必要だと思われた。

以上を踏まえうえて、本研究の目的である「情動」という観点から次の2つの事例の考察を試みた。

① 感触の場合

例えばD児の場合、ただ単に初めての手に付いた砂の感触が嫌だったと推察できる。この推察をもとに考察すると、D児は砂の感触が嫌という「感覚的な不快」を泣くことで表しているだけであり、保育者は「感情」ではなく「情動」と受け止め、D児の泣く行為に関わる必要があると思われた。D児は、感覚で感じた不快を泣く行為で表しているだけなので、泣くことを感情で抑制することができないのではないかと。よってこの「感覚的な刺激に対して泣く行為」は、保育者がまず受け入れることが大切だと思われた。

しかし、嫌だった砂の感触が、「慣れる」ということ

で克服できたのは、観察記録からも読み取ることができた。よって保育者が乗り越えてほしい「嫌」という感覚に対しては、気長に付き合い、何度も経験させることが大切だと思われた。また、砂に触るという感覚を受け入れた後でも、大人にとっては似たような「土」に触る感触を嫌がったことは、D児にとって砂と土の感触は別のものだったということである。よって別のものに対しては、また一から「慣れる」という経験が必要であると思われた。

② 食事の場合

食事の時「嫌で泣く行為」の記述は3人にみられ、観察記録の「嫌で泣く行為」の記述のなかでは一番多かった。口に入れた物に対しての嫌は、「食事の好き嫌い」とも関係して、保育者が神経質になる事柄の一つである。特に乳児の間は、食べて欲しいという保育者の願いのなかで、嫌なものは食べさせないほうがいいのか、それとも食べさせるほうがよいのか、保育者に共通の悩みでもある。食事に関しては「体が拒否する」アレルギーにもつながり、慎重に行うべきであるが、単に好き嫌いということであれば、0歳児の嫌だというのは、感情ではなく身体的な感覚であることが多いということを理解したうえで、無理をしないで少しずつ慣れさせていくというのも克服方法の一つであると思われた。また、E児のように、それまで受け入れていた感覚を突然嫌がるようになることも知っておく必要があるのではないかと。保育者はまずその変化を受け止めて、その後それを克服していく対応を考える必要があると思われた。

また、0歳児クラスという集団として見た場合でも、乳児の嫌で泣く行為は、行為自体は同じにみえても、その内容は乳児によって違い、月齢によっても変化していった。よって、保育者は「嫌で泣く行為」の違いや変化を受け止めたうえで、ひとり一人に対応する必要がある。

4 驚きで泣く行為

(1) 驚きで泣く行為の意味

乳児の「驚きで泣く行為」は、「初めての沐浴にびっくりして」という触覚、「保育者の声に驚いて」という聴覚、「自分のうんこを見て」「急に開いた戸を見て」という視覚の3つの感覚的刺激によるものに分けられた。「嫌で泣く意味」の項でも述べたが、小林(2010)によると、「感覚とは比較的局所的な諸刺激を感覚器官が受容した結果生ずる認知であるとされる」とある。乳児の驚きが「感覚器が受容して認知した結果」であるなら、乳児の驚きで泣く行為もまた身体的刺激による不快の表出であると思われた。しかし、これまでも述べてきたよ

うに、乳児の泣く行為は、一つの事例に関して様々な意味を持っていることが多く、それがこの研究の難しさであった。そしてそれはこの「驚きで泣く行為」に対しても同様であった。例えば「サンタを見て泣く」行為には恐れと同時に「驚き」が含まれている可能性が大きい。また、本研究は保育者の観察記録の記述に沿って考察を試みたが、「驚き」については、感情が変化していく過程など課題もある。

(2) 保育者の関わり

このように「驚きで泣く行為」は様々な意味を持つが、観察記録から低月齢児の驚きは、特に「身体的刺激による不快の表出」であることが推察できた。よって本研究では、保育者は「低月齢児の驚き」に対しては、身体的刺激による不快の表出であることを理解して保育にあたる必要があると思われた。特に、身体的に不安になるような驚かせかた、例えば「耳元での大きな音」等、感覚を極端に刺激する環境は乳児にとって好ましくないもので、保育者は保育環境に配慮しなくてはならない。観察記録からも解るように、乳児の驚きは、思考からの発生ではなく主に、「見る(視覚)」「触れる(触覚)」「聞く(聴覚)」等の五感から生まれる「驚き」であることをふまえて保育にあたる必要があると思われた。

また、0歳児クラスという集団として見た場合、保育者は一年を通して保育環境を整え、ひとり一人の泣く行為の意味を理解し、対応する必要があると思われた。

5 まとめ

0歳児クラスの観察記録からみた乳児の「情動」は、身体的な不快を泣く行為で表すことが多く、特にその傾向は低月齢児に多くみられた。月齢が高くなると、保育所の生活リズムに合わせられるようになり、生理的欲求で泣く行為はみられなくなったが、恐れで泣く行為や嫌で泣く行為、驚いて泣く行為は、月齢が高くなっても続いた。特に、嫌で泣く行為の内容は、月齢が進むと変化し、人との関わりをなかで拒否や抵抗といった内容に変化していくことが推察できた。

保育者の役割としては、0歳児クラスの乳児の泣く行為は、主に「身体的な不快の表現」として受け止める必要があると思われた。このことは、「情緒にかかわる概念として、「気分」「情緒(情動)」「情操」「情熱」「感情」などがある。身体的興奮を表す「情動」と、好き嫌いを表しており価値観に近い「感情」とは、異なる次元の情緒として区別する必要がある」(小林,2010)と解説されているが、筆者も、保育者は「情動」と「感情」を混同しないことが大切だと考える。たとえば食事の時間に、友

だちが食事をしている横で待たされた乳児がいたら、クラスは泣き声でいっぱいになると推察できる。0歳児クラスの場合、「お腹がすいた」というのは、身体的な不快である。乳児がその状況を「慣れる」ということで克服しても、まずは身体的な不快を快に変える保育が必要であり、そこに保育者の役割の重要性があると考えられる。

おわりに

保育者は日々、目の前の子どもに向き合うことで、忙しい日々を送っている。国の0歳児クラスの3人の乳児に1人の保育者という配置基準のなかでも、大半の保育者は、受け持った乳児と1対1での関わりを持つようと努力をしている。今回改めて、現場の保育者の観察記録をもとに「泣く行為」の読み取りを行うことで、保育者は思った以上に子どもの様子を捉えていることがわかった。今回の「泣く行為」の抽出にあたって、泣く行為自体はかなり細かく記述されていた。

しかしながら、この観察記録の膨大なデータを分析し考察することは、現場ではなかなか困難である。「泣く行為」だけでも多くの記述があったが、観察記録への記述だけで終わっているのが現状である。そのため、保育者は乳児の「泣く行為」を違った意味で受け取ったり、ただ泣くだけの行為として捉え負のイメージを持ったりするのではないだろうか。現に筆者にも今回の研究で初めてみてきたものがあった。だからこそ、保育者がしていることを言語化し、明確にすることが必要だと思われる。今回の研究の意義はそこにあると思っている。今回の研究テーマである「情動」については、もっと奥深いものだと認識し、時代によっての変化等、より深い考察が必要なものだと受け止めている。しかし乳児が泣くことに「どんな意味があるのか」保育者はその泣く行為を「どう受け止め、どう関わったらよいのか」、保育者が今まで経験と勘に頼ってきた保育を、分析という形で考察し保育者の役割の重要性を明確にすること、それが保育者の質の向上に繋がることを期待している。そのために、微力ではあるが、「乳児の泣く行為」の考察や、「乳児の笑う行為」の考察に向き合いたいと思っている。

註

¹⁾ 保育に携わる者の呼び名としては「保育士」が使われるが、施設によって「保育教諭」や「看護師」、免許を持たない「保育助手」が関わったりする場合があるので、論文内では「保育者」に統一した。

²⁾ 情動。近年、情動という語が情緒の同義語として用いられるようになった。情緒とは、喜怒哀楽などのように、刺激によって

引き起こされる急激な心理的、身体的変化のこと。情緒と同義語的な用語として感情があるが、一般的に感情は情緒よりも広い概念で用いられる。基本的情緒として、Ekman (1975) は驚き、恐れ、嫌悪、怒り、楽しみ、悲しみをあげた。また Bridges (1932) は、出生時の子どもの情緒は不快を帯びた興奮状態で、その後3か月ほどの間に、興奮の他に不快と快が分化し、6か月頃に不快は恐れ、嫌悪、怒りに細分化すると報告した。(乳幼児発達事典、1985)

筆者は、実践の場における保育者が、情緒（情動）と感情を混同しているのではないかと思う場に出会うことが多くあった。よって本研究では、情緒と同義語的に使われる感情と区別するために情動という言葉を使った。また、先行研究における基本的な情緒を参考に、乳児の泣く行為を「不快」「驚き」「恐れ」「嫌」に分けて考察を行った。

³⁾ 2012年5月から7月にかけて、A市において、その年の0歳児クラスと1歳児クラスの担当保育士を対象に筆者が行った質問紙調査。A市の保育課に依頼し、全33の保育所保育園に質問紙を配布、全園の保育者173名から回答を得た。乳児の「泣く行為」と「笑う行為」に対して様々な意見が寄せられた。

【引用文献】

- ARNOLD, GESELL (1940). THE FIRST FIVE YEARS OF LIFE. 山下俊郎訳 (1966).
乳幼児の心理学－出生より5歳まで－. 家政教育社.
星三和子・塩崎美穂・勝間万喜・大川里香 (2009). 保育士はゼロ歳児の〈泣き〉をどうみているか－インタビュー調査から乳児保育理論の検討へ－. 保育学研究第47巻第2号. pp49-59.
開一夫 (2011). 赤ちゃんの不思議. 岩波新書.
黒田実郎・伊藤隆二監修. 隠岐忠彦・花田勝憲編 (1985). 乳幼児発達事典. 岩崎学術出版社
小林芳郎編 (2012). 発達のための臨床心理学. 保育出版社.
ニューズウィーク SPECIAL EDITION (2011). 0歳からの教育. CCCメディアハウス. pp56-57
志村洋子 (2005). 乳児の音声における非言語情報に関する実験的研究. 風間書房

【参考文献】

- 阿部和子 (2007). 乳幼児保育の基本. 萌文書林.
陳省仁 (1986). 新生児・乳児の泣きについて初期の母子相互交渉及び情動発達における泣きの意味. 北海道大学教育学部紀要 48巻. pp187-206.
Daniel N. Stern (1985). The Interpersonal World Of The Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. 乳児の対人社会 (理論編) 小此木啓吾・丸田俊彦監訳 神庭靖子・神庭重信訳 (1989). 岩崎学術出版社.
Daniel N. Stern (1985). The Interpersonal World Of The Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. 乳児の対人社会 (臨床編) 小此木啓吾・丸田俊彦監訳 神庭靖子・神庭重信訳 (1989). 岩崎学術出版社.
Erik H. Erikson (1950). CHILDHOOD AND SOCIETY. 幼児期と社会1 仁科弥生訳 (1977). みすず書房.
Erik H. Erikson (1950). CHILDHOOD AND SOCIETY. 幼児期と社会2 仁科弥生訳 (1980). みすず書房.

保育所保育指針解説書 (2008). 厚生労働省編. フレーベル館.
川上清文・高井清子・川上文人 (2012). ヒトはなぜほほえむのか. 新曜社.
小西行郎 (2003). 赤ちゃんと脳科学. 集英社.
大方美香 (2005). 乳幼児教育学. 久美株式会社.
斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子・辰野俊子 (1981). 生後2年間の伝達行動の発達-母子相互作用における発声行動の分析-. 教育心理学研第29巻第1号. pp20-29
佐々木正美 (1996). エリクソンとの散歩. 子育て協会.
玉川大学あかちゃんラボ編 (2011). なるほど! 赤ちゃん学. 新潮社.

根ヶ山幸一・星三和子・土谷みち子・松永静子・汐見稔幸 (2005). 保育園0歳児クラスにおける乳児の泣き-保育士による観察記録を手がかりに-保育学研究第43巻第2号. pp65-72
東京都公立保育園研究会 (1997). 0歳児保育の実際. 東京都公立保育園研究会. 231
富田和巳 (2006). 小児心療内科読本-わたしの考える現代の子ども-. 医学書院.
吉本和子 (2002). 乳児保育 一人ひとりが大切に育てられるために. エイデル研究所.

The Crying of Infants and Human Contact (I): An Observation-based Study

Kiyoe Sasamoto*, Mika Oogata**

* *Yao Municipal Sounai Day Care Center*, ** *Osaka University of Comprehensive Children Education*

Focusing on the crying of infants at a nursery school, this paper aims to identify the reasons for their crying and the role of nursery teachers in that process. The authors have analysed the records in which nursery teachers observed the behaviour of ten infants for the year starting on 1 April 2012 when they joined Nursery School A in City A (except for one infant who started attending the school on 20 October in the same year). The infants were all between 0 and 1 year old when they joined the school. From the records, the authors have been able to identify a wide range of reasons for their crying and the circumstances in which they cry. However, this paper focuses on four types of crying which are related to the expression of emotions. These are: discomfort, fear, dislike, and surprise, which derive from physical needs. In every case, the crying resulted from both physical and psychological causes. Especially it was common among the infants that a physical stimulus would lead to an emotional reaction. The authors think that this finding shows the importance of adult behaviour when crying occurs. Also, the frequency of crying due to physical needs dropped after the infant passed the age of 1. This finding may suggest that the infant adjusts himself or herself to the rhythm of social life in the kindergarten, which distinctly differs from that of the home, around the age of 1. The research has shown that nursery teachers and other adults play a crucial role in responding to crying, and that the authors have confirmed the importance of analysing observation records in order to improve responses to infants.

Key words : infants, crying, emotions, the role of nursery teachers